

「ほな男になれや！」

おろんぼろん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

世界が滅亡する数時間前、ある男女はこんなことを話していた。

「異世界転生した先で、可愛い私が襲われへんかが心配やねんなあ」

女の心配を解消する提案をしていく男に難癖をつける女に、男はついにキレた。そして、キレた末の最後の提案が現実になって……？

これは、同じ世界を生き、同じ世界を終え、同じ世界に生まれた男女が織りなすド下ネタ異世界TSギャグコメディ。

# 目次

「ほな男になれや！」

1



「ほな男になれや！」

どうやら今日には世界が滅ぶらしい。そのことを知ったのは三日前のことだった。突然テレビが切り替わり、地球にもすごいやつが向かってきてるとかなんとかで、簡単に言うると三日後には地球が滅びます、といった内容が全国に広がり、現代のネット社会の拡散力によってそれは瞬く間に全国民へと伝えられた。嘘だろと嘲笑する者が何人もいたが、国会、教育機関がまとめて停止し始めるのをみて本当だと判断したらしく、今はほとんどの人が思い思いの日々を過ごしている。そして、そんな日々も残すところあと一日。

世界最後の日、人はどう過ごさだろう。家族と過ごす、恋人と過ごす、友だちと過ごす、はたまた思い切って大犯罪をやってみる。今までクソ上司の下で頑張っていた社会人は復讐するチャンスかもしれない。今なら警察も動かないだろうし、なんでもやりたいう放題だ。現に、今俺の目の前にいるクラスメイトだつて男に襲われてたし。あの時は必死になって助けて誰もいない学校に逃げ込んだ。助けた手前放置するわけにもいかないし、外に出たら誰に襲われるかわからないため俺が食料等を確保し続け、こうして世界最後の日を共に迎えている。

「今日やなあ」

「おう」

綺麗な顔を頬杖でぶにゆ、と歪ませて俺を見ながらの言葉に短く返す。

「夜には死ぬんかあ」

いつになくネガティブなことを言うな、となぜかじつと俺を見続けるクラスメイトを見て思う。彼女はポジティブな人間で、クラスを引っ張るリーダー的な存在だった。頭の方は少々よろしくないが、明るく常に前向きなその姿にクラスどころか学校中の生徒が惹かれていたものだが、流石に世界最後の日ともなるとネガティブにもなるか。

「どんな異世界に転生するんやろなあ」

ポジティブやないか。

「は? 異世界?」

「そそ。今流行ってるやろ?」

「実際に転生するっていう形で流行ってるわけちゃうぞ、アレ」

あくまで物語として流行っているだけで、実際にやる形で流行っているわけではない。異世界転生なんて現実にあるわけがないし、第一あつたとしてそれがどうやってこつちの世界に伝わってくるのか、という問題が出てくる。

「あんなもん現実にあるわけないやろ」

「でも死んだこともないのにそんなんわからへんやん」

「……まあそう言われると」

ない、と断言していいくらいに思っているが、確かに死んだことがあるわけでもないし異世界転生があるのを証明できないのと同じようにないことも証明できない。なるほど、アホのくせによくやる。

「せやったら異世界転生はある！って考えた方が楽しくてええやん？」

「それはそうやな」

やろ？と得意気に笑うクラスメイト。どうやらこのクラスメイトは世界最後の日でも変わらずポジティブらしい。

「でな。転生するならどんなところがいい？」

「どんなところって？」

「例えばファンタジーな世界とか」

俺も学生なのでそういった創作物にはある程度触れてきている。ファンタジーな世界と言えばやはり魔法。俺たちのような科学まみれな世界で育った人間は魔法に憧れること間違いなし。更に男なら一度は憧れる戦闘もあり、剣と魔法を手に戦うその世界は確かに魅力的だ。

「ええかもせえへんな、ファンタジー」

「でも私みたいに可愛い女の子やったら、屈強な男たちに襲われへんかっていう心配が  
あんねんな」

言つて、悩ましげなため息。そもそも異世界転生をしたときに元の容姿で転生するの  
かというところが気になるが、どうせこのクラスメイトなら顔が変わつたとしても綺麗  
なんだろうから触れないでおこう。男たちに襲われるっていうのも否定はできないし。

「それやったらめちやくちや汚いカツコして、男を萎えさせたらええんちやう？」

「私女の子やから身だしなみには氣い遣いたいやん」

それもそうか。襲ってくる男を警戒してなんで女の子側が汚くならなきゃいけない  
んだつていう話になるし、これは俺が失礼だつた。

「なら女好きつていうことにして、精神的な面で男を突き放したらええんちやう？」

「私別に女の子好きちやうのに自分偽らなあかんの？」

「じゃあないやろ襲われたくないんやったら」

「女の子のことが好きな女の子のことが好きな男がおるかもせんやろ！」

「ややこしいな！」

つまり、男のよさを教えてやるよつていう男がいるかもしれないつてことだろう。確  
かにいないとは言いきれない。俺は男だからそういうえつちな本があるということを知  
っている。別に俺が好き好んで読んでいるわけじゃないが、知っている。



「ならどんな男よりも強くなって、襲われても大丈夫なようになったらええやろ！」

「私は男の人に守られたいって願望があんのに、どんな男よりも強くなったら守つても  
らわれへんやろ！」

「知るかそんなもん！」

「人の願望をそんなもんって言うなや！」

あんなにみんなを引つ張っていたのに守られたい願望があるって可愛いなこいつ。  
ああ言えばこういうからムカついてきてるけど。

「なら世界最強の男よりちよつとだけ弱いくらいまで鍛えて、その男に守つてもらつた  
らええやろ！」

「その男に襲われたらどうすんねん！」

「お前を守つてくれてんやから結婚せえや！そうしたら襲われたつてことになれへんや  
ろ！」

「それやったら私は生まれた瞬間から『あ、私は世界最強の男と結婚すんねんな』つて思  
い続けて、すべての恋愛がおもろなくなるやろ！」

「世界最強の男とゴールインする前に色んな恋愛できるんやたらおもろいやんけ！」

「私は運命の人が決まつてるのに他の人になびいてしまつてる自分がおもないつて言  
うてんねん！」

「カッコつけんなー！」

世界最後の日になんの話をしてるんだろう、という考えが頭をよぎったがそれを頭の隅に追いやって、文句しか言わないクラスメイトを睨みつける。こいつのどこがポジティブなんだ？ さつきから俺の提案をめちゃくちゃな理由で却下しやがって。ポジティブなら「えー！ それいいー！」ってバカみたいに肯定しろや。

「なら誰もおらんような秘境に行つて一人で暮らせ！ そうしたら誰にも襲われへんやろ！」

「確かに誰もおらんとこで一人で暮らしてたら普段は襲われへんわ！」

「襲われへんやろがい！」

「でも秘境つて言うたら修行も修行、ザ・修行スポットやろ！ しかも歴戦の猛者タイプの修行スポットや！ そんなやつがきてもし見つかつたら襲われるに決まってるやろ！」

そんな状況で襲われたら助けもないし、自分でなんとかするしかない。秘境に住んでるなら地の利を生かして逃げられるだろうとは思うが、そんなことを言つても屁理屈で返されるに決まってる。それなら、

「……ほな男になれや！」

「どういふことやねん」

俺の言葉にクラスメイトが訝し気な視線を俺に向ける。なんでお前にそんな目で見

られなきやいけないんだという言葉をぐっと飲みこんで、一気にまくし立てた。

「男に襲われたくないんやったら男に転生したらええやろ！男に転生したら体に引っ張られて女の子が好きになるし、男からも襲われへんし何の心配もないやんけ！」

「もし私が女の子好きになられへんかったらどうすんねん！」

「男と付き合え！」

「男に転生して男と付き合うってどんだけトリッキーなことしてんねん！」

「なら俺が女なってお前と付き合うわ！それやったら身体的にも精神的にも男女になるから何の問題もないやろ！」

「言うたなお前！後で嫌って言うても知らんからな！」

「何でもやれや！」

多くの自然に囲まれた平和な村。近くにいる都に守ってもらっているこの村は安全であり、普通なら成人すれば都に行く若者もこの村に残ることが多く、都でも『若い村』

として有名である。

そんな『若い村』から明後日、二人の若者が都に行く。

「確かにあの時はなんでもやれって言うたけど!」

「約束したやろ!それを破るのは男らしくないぞ!」

「今は女やからノーカンノーカン!」

滅亡した世界からまさかの異世界転生をした俺たちである。しかも性別がお互い逆転して。

「大体、何年我慢したと思ってるんねん!前世から知ってる可愛らしい女の子が、しかも前世で何やつてもいいって約束してくれた女の子がずっと近くにおんのに16年間我慢してきたんやぞ!褒めて舐めろ!」

「男の性欲を知ってる者として褒めはするけど舐めはせんわ!」

俺はエリス・ゼーラ、クラスメイトはリオス・アウリエという名前になり、前世で話していたような魔法があるファンタジーな世界に転生した。容姿もがつつり変わり、俺は薄い青の髪を腰まで伸ばし、同色の瞳、リオスが言ったように可愛らしい顔をしている。俺が男なら思わず求婚しちゃうくらい可愛い。いや、精神は男なんだけども。

今俺を抑え込んで襲おうとしているリオスは白い髪をツンツンと逆立たせ、嫉妬するくらい綺麗な黄色い瞳に、俺が男だったら思わずボコボコにしておもしろアートにした

くなるほど綺麗な顔をしている。襲われている今おもしろアートにしてやってもいいのだが、実力的に無理だ。

「やめろ！俺はまだ女の子が好きやねん！」

「男の良さ教えたるわ！」

「お前が心配してたやつにお前がなつてどうすんねん！」

まさか本当に女の子のことが好きな女の子のことが好きな男がいるとは。いや、女の子のことが好きな女の子のことが好きな精神的に女の子な男？ん？は？

「ほな最後までは我慢するから、めちやくちやディープなキスしていい？」

「ええわけあるか！あとディープで深いって意味あんのにめちやくちやディープってなんやねん！喉舐めんのか！」

「教えたるわ。んー」

「やめろ！ほら、お前前世で襲われるの嫌がつてたやろ!?!お前は今お前が嫌がつてたことと同じことしようとしてるんやぞ！」

「へへ、そもそも私の部屋にのこのこ入ってきた時点でほんまは嫌じゃないってことはわかつてるんやぞ？」

「明後日都に行くから真面目な話すると思うやろ！普通！」

部屋に呼ばれたのは明後日都に行くから気合入れようぜ、みたいな話するのかと思ひ

きやいきなり押し倒されるって、めちやくちや怖いぞ。あ、俺男の頃より筋力落ちてるな、とか男に力で勝てないんだな、とか色んなことが怖い。なんで前世であんなこと言っちゃったんだろう。

「真面目な話、子ども作らへん?」

「そういう真面目な話ちやうねん!もつとこう、これからについてとか!」

「これからについてのことやん」

「そやけどそやないねん!」

ベッドの上で攻防を繰り返す。もう魔法使ってもいいんじゃないか?こいつアホだから幻術とかめちやくちや効くだろうし、幻の俺に腰を振ってもらおうかな。幻でもいいやけど。ただ、こいつが本気を出せば今頃めちやくちやになってるので、全力で襲ってきていないことが唯一の救いだらう。

「ほら、明日みんながお祝いしてくれるみたいやし、今そんなことしたら体力なくなってしまうやろ?」

「私の性欲とみんなのお祝い、どっちが大事かわかるよな?」

「お祝いに決まってるやろ!」

せつかくみんながお祝いしてくれようとしているのに、こいつは自分の性欲の方が重要だというのか。……元男としてわからないでもない。男はしょうもない生き物なの

で、こうなってしまうとモラルが一気になくなってしまふのだ。それにしたってなきすぎだと思うが。

「大体、これからは魔物と戦う日々が続くしいつ死ぬかわからんからやれるうちにヤツとかな損やろ」

「損得で人の純潔を散らそうとすな!」

このままでは本当にやられてしまう。まだ男としての心が残っている今それだけは勘弁してほしい。いくら前世が女の子だったからって今見た目は完全に男だ。俺からすれば男の俺が男に襲われているのと同じこと。

じわじわ追いつめられもうダメかと諦めかけたその時、部屋の扉がバン!と勢いよく開けられた。

「何してんの!」

「お母さん!」

現れたのはリオスのお母さん。息子が女の子の子を襲う姿を見て怒り心頭なのだろうか、眉間に皺を寄せてとても怖い顔をしている。

「ちやうねん!これは……」

俺の上から離れて弁明を始めるリオスに、リオスのお母さんはすう、と息を吸うと村中に響くくらいの大声で言った。

「えっちなことは!!! 都で!!! しなさい!!!」

そうじゃないんやけどなあ、という呟きはリオスのお母さんの叫びの余韻にかき消された。

翌日。

「才能ある若者の門出にイイイイイイ!!!」

「かんぱアアアアアア!!!」

俺たちの村では、明日都に出発する俺たちを祝う宴会が執り行われていた。ちなみに今の乾杯は7回目の乾杯であり、初めは遠慮がちにちびちび飲んでいたりオスも今では中心に立って豪快に酒を飲みほしている。16歳で成人に数えられるこの世界ではもちろん酒も16歳から解禁となるが、俺は前世の感覚がまだ残っており、酒に口をつけていない。



酔ってしまえばリオスに襲われそうだし。

「なんぼのもんじゃ!!」

「また樽が空いたぞ!」

「こうなったら酒で殺してまえ!もつと持つてこい!」

俺が襲われると心配しているリオスは村の人たちに酒で殺されそうになっているのでいらない心配かもしれないが、用心するに越したことはない。というか初めて酒飲むのに強すぎない?リオスの近くに樽三つくらい転がってるし。

「エリスは飲まんでもええの?」

「お婆さん」

そんなリオスを遠巻きに眺めていると、背後からリオスのお母さんがひよっこりと顔を出した。昨日あんなことがあったから正直言うど気まずいが、お婆さんが気にしていないようなのでこちらもそのことには触れずいつもの調子で返す。

「ちよつと怖くて。それに、リオスがあんなんですから俺がしつかりせんと」

「お嫁さん根性?」

「弟みたいなもんです」

「つれへんなあ」

言って、朗らかに笑ってお酒を一口。リオスを産んだ人だから当然綺麗な顔をしてい

て、人妻だろうが知ったことかと求婚したくなる女性であるおばさんに、俺はものすごく悩まされている。どうもこの人は俺とリオスをくつつけたいらしく、ことあるごとにさっきのようなからかいを交えてくるのだ。俺が心から女の子ならリオスに子宮から惚れているだろうが、生憎俺の心は男の子。おばさんの期待に応えることはできない。「ほら、あの子どことなくふらふらしてるとこあるやろ? エリスはしつかりしてるからお嫁さんになってくれたら安心かなあつて」

「別に夫婦にならなくても一緒にいればいいじゃないですか」  
「孫の顔」

「リオスにいい人ができたら俺が退散するんで、心配いらないます」

旅に出ればきつとりオスにいい人が見つかるだろう。前世では女の子を好きになれないって心配していたが、昨日の俺に対する所業をみるに女の子大好きになってるっぽいし、案外早く離れる時がくるかもしれない。そうなれば俺は女の子が好きで女の子を探し、清らかな恋愛を楽しむのだ。

「んー、リオスはエリス以外あかんと思うんやけど」

「んなことないですつて。リオスなら選り取り見取りでしょうし」

「エリスー!! 私と結婚して帰宅した私に『おかえりなさい。ご飯にする? お風呂にする? それとも……私、がいいなあ』ってメスの顔しながら出迎えてー!!」

「ほら」

「あんな具体的で気色の悪い妄想ぶちまけてくる相手はごめんです」

なにやらくねくねしながら近寄ってきたリオスを押しよせ、「むりです」と首を振る。どうやらリオスの中で俺は淫乱女になり果ててしまっているらしい。性欲まみれの脳の哀れなりオスに呆れた俺は、近くにあつた水をリオスに無理やり飲ませてやった。これで少しはマシになるとはいいが、元々おかしなやつなのであまり効果は期待していない。

「エリスが飲ませてくれるとただの水でもおいしいなあ」

「ならドブ水飲ませたらどうか？」

「ドブ水はマズいに決まってるやろ。何言うてんねん」

「腹立つ！」

地味に胸まで伸びてきていたりオスの手を払いのけて軽くビンタ。こいつ俺に対してなら何をしてもいいって勘違いしてないか？無許可で触ってきたら思ってるよりもあつさり殺すぞ。

酔いが回ってきたのか体から力が抜けて寄りかかってきたリオスを仕方なく支え、明日から大丈夫かな、と不安が募る。主に貞操的な意味で。リオスはやるときはやるやつなので生死については心配していないが、やるときはやるやつでもあるのでそつちが心

配だ。宿は絶対に別の部屋でとろう。

「リオスが死んだからお開きにするか!」

「エリスー! 襲われんなよー!」

じゃああんたらがこいつ持つてけよ、という提案も空しく村人たちは自分の家に帰って行つてしまう。こういうときつてお開きの挨拶とかあるもんじやないのかと思つたが、この人たちは酒が飲みたいだけなのでそういうのはどうでもいいのだろう。お祝いと言いつつ俺はほとんど放置されてたし。「エリスみたいな綺麗な子が近くにいると何するかわからんから、あつち行つとけ!」つて言われたから避難しただけだけど。

「んー……」

「あーめんどくさ。おばさん、手伝つてくれませんか?」

リオスの体を引つ張り上げて肩を貸しながらおばさんに助けを求め。このままここに放置していつてやつてもいいのだが、それをすると明日の出発が遅れてしまうかもしれないのでナンセンス。ならおばさんの助けを借りてこいつを部屋まで運んだ方がいい。そう思つて求めた助けに、返事はなかった。

不思議に思つて周りを見ると既に人っこ一人おらず、あるのは空になつた酒樽と静寂のみ。あと酒に潰されて俺に担がれてるバカ。

「……んー」

俺は考えるのをやめて、リオスの体を引きずりながらリオスの部屋へ向かった。

リオスをベッドに向かつて投げ飛ばし、そのまま俺もベッドに座る。女の子の非力さを思い知った。魔法は使えても別に体は鍛えていないため、むしろ平均より筋力がない俺からすればリオスの体をここまで引っ張ってくるのは一苦労だった。なぜかリオスの家についてもおぼさんいないし。こりやうちの方で飲みなおしてるな？

「うう……」

こいつも黙ってりやただのイケメンなのに。村の女の子たちもリオスにはデレデレだし。こいつの性格はふざけているが、優しい上に明るくしかも強い。モテない要素がない。羨ましい。村の女の子たちは俺のことを羨んでるけど。恐らくリオスとの距離が一番近いからだろうが、羨ましいなら即刻譲ってあげたい。昨日襲われるまではリオスの隣にいるのは心地良いものだったが、今はいつ襲われるか気が気じゃない。

「えりすー、水……」

「はいはい。勝手に台所使うで?」

「んー」

ダメ亭主を相手にしているような気持ちも味わいつつリオスの部屋を後にし、台所に向かう。生まれてからずっとこの家には入り浸っていたので食器の場所も家具の配置も、更にはへそくりの場所まで把握している。おばさんが使っているであろうものすごい道具を発見してしまったときはつい興奮してしまった。エロ漫画なら俺とおばさんの濃厚な絡みが始まったことだろう。

バカなことを考えながら台所に到着した俺はグラスを二つ取り出し、水を入れる。リオスのバカの分と自分の分だ。リオスの酒臭さに少し酔ってしまったらしく、なんとなくふらふらする。どうやら俺は酒が弱いらしい。

水の入ったグラスを手にもつリオスの待つ部屋に向かう。寝てくれていると助かるなあと思いつつ部屋に入ると、願ひ空しくリオスは起きていた。しかもベッドに座って少し回復した様子だった。

「ほら、持ってきたで」

「ん、あんがと」

俺の手から二つのグラスをひったくったりリオスはその両方を一気に飲み干し、満足そ

うな顔で俺に笑いかけた。いや、それ片方俺のなんだけど……。

「ちようど二杯欲しいと思つててんなあ」

「……まあええわ」

湧いてきた怒りもリオスの間抜け面を見たらどこかへ吹き飛び、俺は少し笑つてリオスの隣に座つた。酒が入っているためか、リオスの体温がいつもより高く感じる。火照つた顔がどこことなく可愛らしい。

「明日やなあ」

「明日やで。やのにそんな飲んで、だらしないなあ」

本当に大丈夫だろうか。二日酔いで出発できないなんてことにならなければいいが、そのときはたたき起こしてでも連れて行こう。俺の労力が半端ないが、リオスはそうされた方が辛いはずだ。それならその程度の労力は苦じやない。

「てか、酒飲んでなかつたな」

「そりやリオスがあんだけ飲んでたらな。一緒に旅に出る以上、どつちかがしつかりせなあかんやろ」

「酔つた勢いでやれると思つたのに」

「大学生の新歓か」

まだああいう性犯罪者パーティは存在するのだろうか。こつちにも似たようなもの

が存在するなら気を付けなければならない。リオスはその辺り頼りにならない気がするし。

「でもさ、実際ほんまに嫌なん? 私みたいなイケメンに抱かれるんやで?」

「逆に聞くけど、前世で俺に無理やり襲われたらどう思う?」

「待ってただけど」

「ん?」

「待ってただけど?」

雲行きが怪しくなってきた。リオスの潤んだ瞳が俺をじつと見つめ、そつと手を重ねてくる。

「自分でもチョロいと思うけど、もうあの時には惚れてたし、抱かれてもいいって思ってたし」

「ちよつと待って。やるためにアプローチの仕方変えてきてる? ストレートがあかんなら変化球みたいなの?」

今ものすごくややこしい状況だ。昨日リオスは男として女の俺に迫ってきていたが、今は女として男の俺に迫ってきている。正直少しくるものがある。えー、俺前世で襲ってたら受け入れてくれたんだ。ヤツときやよかった。

「姿と性別が変わっただけやん? それにさ」



「な、なんやねん」

リオスは自然な動作で重ねていた手を俺の顎に添えて軽く持ち上げると、俺の唇を親指で一撫でてから耳元に顔を寄せて、

「私なら、ほんまの女の子の良さ教えてあげられるけど？」

「――」

お、落ち着け落ち着け。流されるな。こいつは今腹の奥で「もう少し、もう少し押せば行ける！」って考えてるはず。なぜなら前世の俺がこいつの立場なら絶対そう思ってるから。男はやるためならどこまでも狡猾になれる生き物だ。そのためならどんなことでもするし、愛情を持ってやるときなんて人生に数回しかない。いや、愛情を持ってたらいいってわけじゃないしなんとなく今リオスは愛情を持って俺に接してくれてるなって感じていたりもするけどそういうことじゃなくて、

「エリス？」

「ま、まっつて」

昨日はいやらしいとしか思わなかったリオスの表情は、今日みるとなぜか色っぽい。いつのまにか押し倒されてるし体がリオスの脚に挟まれて動けないしなんか優しく撫でられてるし！ずるい！俺が前世で女の子にやりたかったことを俺にしやがって！あれ？それなら俺もこの世界で女の子に同じことすればよくね？いやいや違う違う今考

えるべきはそんなことじゃない。いかにしてこの状況から抜け出すかを考えなければならぬ。

「んー? 昨日はあんなに抵抗してたのに、今はあんまりやなあ」

「ほ、ほら。酔っ払いを手荒く扱うのもなんやし?」

「手荒くって、そんな手荒くせんでも抜け出せるくらいには力弱めてるつもりやけど?」

言われて気づく。そういえば俺の体を挟んでいる脚もそこまで力が入ってないし、そもそも腕は抑えられていない。結構自由な状態だ。じゃあなんで俺は抜け出さないんだ?

「期待してる、とかなら嬉しいなあ」

「バカアホ間抜け! 俺がいつこんなしょうもないことで股ア濡らすような女になった!!?」

「口悪っ」

俺の罵詈雑言をものともせず、リオスは俺の首元に顔を埋めて、そのまま首筋にキスを落としてきた。なぜか訪れたびりっという感覚に『ああ、そういやこいつ雷の魔法使うよなあ』とどうでもいいことを思いながらとうとう全身から力が抜ける。顔を上げたりオスを見ると、勝ち誇った顔で俺を見下ろしていた。

「お、メスの顔してる」

「今すぐ俺を殴れ。歯の数が少なくなったらお前も萎えるやろ」

「じゃあ俺の歯が赤ちやんの本数になつたら、今エリスは抵抗するんか？」

「そんでもないかもなあ、と返すと、リオスはニヤリと笑つて服を脱いだ。

その夜。俺の初めせかいが奪ほうわかいれた。

翌日。村人の声援を背に俺たちは旅立った。昨日あれだけ飲んでいたのでびんびんしているリオスの回復力に安心しつつ、腰をさすりながらリオスを睨みつける。

「……」

「3回やで？」

「昨日やった回数が気になって睨んだんちやうねん」

嬉しそうに三本の指を立てるリオスを軽く殴つて、ため息。

「勘違いすんなよ。俺はまだ女の子が好きやし、どうにかして男に戻ろうとすら思つて

るからな」

「あー、ファンタジーやしそういう魔法があるかもせえへんな」

昨日は流されてああなつたが、今後ああいうことはない。俺はまだ女の子が好きだ。恐らく。今日朝起きてから男を見てドキツとすることがなかったからそのはずだ。だから、俺はどうにかして男になる方法を探して男になり、可愛い女の子といろんなことをしようと思う。昨日俺がリオスにされたように。

ムカつく!

「それなら、私も女の子に戻ったらええんちゃう?そしたら今度はエリスが男で、私が女で、ヤろうや」

「いいんですか!?!」

「まあ男と女が入れ替わる方法が見つかる前に、エリスをマジモンのメスにしたるわ」

「ひい」

こうして。

俺は男に戻って女の子と色んなことをするための、リオスは俺をマジモンのメスにするための旅が始まった。本来の目的は世界平和のために魔物の親玉を叩くことだが、そんなものより男に戻る方が重要だ。

どうせ、世界はいつか滅亡するんだから。